

さわやかトカラ情報

一隅を照らす十島の教育

発行元 十島村教育委員会

〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号 ☎099-227-9771

E-mail toshima-ky@tokara.jp

二月・・・冬のたましい

十島村教育長 原口 英典

「寒いね」と話しかければ

「寒いね」と答える人のいるあたたかさ(「サラダ記念日」) 14～5年前、大島に勤務しているとき、「朝の会」の折、時の局長が提示された俵万智さんの一首。余寒のこの時期になると思い出す一首である。

今朝は、路上のごみを拾う指先が、いつになく痛いほどの冷たい日となった。ふっとこの「『寒いね』と・・・」という一首が脳裏をよぎる。自然の作り出す「寒さ」を、応答する人によって醸し出される「温かさ」に置き換える俵さんの豊かな感性に、今さらながら唸ってしまう。そして「果たして己は、そんな温かみのある人間か」という問いが口をついて出る。その答えは自明。共感する心の希薄さを思い知らされる。

渡辺和子さんもその著書「目に見えないけれど大切なもの」の中に、己の冷たさを垣間見る瞬間のことを書いている。仕事を終えて、廊下を通る途中ですれ違った二人に、ひと言「ただいま」。その声に一人は、「お帰りなさい」と答えてくれ、もう一人は無言だった。その瞬間、「せっかくあいさつをしたのに」と心の中に波が立つ。波が立つということは、他をとがめる己の心の冷たさにも通じる。

せっかくあいさつしたのになぜ？傷つく中に、何かを求めている自分が透いて見える。祈りの人にして、なお苦悶する日常である。

二月は、生きていく姿勢としての「初心」を考えさせられる「寒」と「温」の季節である。

波を追ふ波いそがしき二月かな(久保田万太郎)

【 村社会教育委員の会 】

村社会教育委員の会は、2月22日(金)にTV会議システムで行われました。教育長及び委員長のあいさつに引き続き、提案された「平成24年度事業について」、「学校応援団について」等熱心に協議されました。

【 平成24年度文部科学大臣優秀教員表彰 】

宝島中学校 二宮 浩一先生
おめでとうございます

【 としまファミリー劇場盛会裏に！ 】

口之島でのファミリー劇場は、2月9日(土)に、日本舞踊藤原流の谷口紀子さん御一行5人をお迎えして、コミュニティーセンターで開催されました。お馴染みの「おこさ節」「矢切の渡し」「おはら節」等12演目に加えて、アンコールの3演目の踊りを披露していただき、65人の皆さんに、大好評でした。



宝島でのファミリー劇場も、2月10日(日)に、島唄者築地俊造さんを迎えて、コミュニティーセンターにおいて開催されました。代表的な奄美島唄「朝花節」「ワイド節」「カンツメ節」等10曲の熱唱に58人の会場の皆さんは、拍手喝采。最後の六調で最高潮に達しました。リクエストにも3曲ほど応えていただき成功裏に終わりました。



【 入賞おめでとうございます 】

- 第45回手紙作文コンクール
 - はがき作文部門 銀賞 ・小林 ひかる(中之島小3年)
 - 「チャレンジかごしま」ランキング <1月号に続く> 種目[レッツ短縄跳び]
- 8位 ・悪石島小学校3年生
- 第28回県児童生徒ゆめ立体・彫刻展
 - 鹿児島市教育委員会賞 ・日高 裕星(口之島中1年)
 - 特選 ・高本宇宙(口之島小1年)・高本海人(口之島小5年)
 - ・永田征也(口之島中2年)
 - 入選 ・永吉美遥(口之島小2年)・山元柊星(口之島小3年)
 - ・永吉美悠(口之島小4年)・山元悠希(口之島小6年)
 - ・大隈翔太(口之島中3年)

【 絆 】 シリーズ 山海留学生として学ぶ

宝島での6か月を振り返って その1(3月号へ続く)
坂野 誠省 現在中3年生<熊本市>(宝島中2年生時)

僕は宝島に来る前は、宝島はどんなところだろうか、早く行きたいと思っていました。熊本にいた頃は、家出とかもたくさんしていて、親と離れたいから、とにかく行こうと思っていましたが、友達の陸くんから話を聞いて、環境を変えて頑張っていきたいとも思いました。そのうち、だんだん興味が出てきて、TVなどでも、宝島のことを見ていました。

そして、初め、来た時には、島民の方々が温かく迎えてくれたのが強く心に残っています。

最初に港であいさつした後、車に乗って民宿(里親)に行きました。その時は、正直誰が里親なのか分からずに、少し不安でした。それから、自分たちの部屋に行き、「過ごしやすいそう、ここでの生活をしよう」と思いました。

その後、海に行き泳いだりして、宝島の美しさに感動したのもよく覚えています。最初は、民宿での暮らしは慣れませんでした。そのうえ、初日は、刺身などの料理が出てきて驚きました。とても美味しかったのを思い出します。何も分からなかった僕たちに一から教えていただきました。

ちゃんとしななかったりした時には、叱りながらも、きちんと教えてくれたのを思い出します。朝起きるのが苦手の僕たちを起こしてくださったことも感謝しています。そして、バランスのとれた御飯を作ってください、嬉しかったことは、ずっと忘れません。

僕は、山海留学生でここ宝島に来ましたが、もうすぐここを離れることになる。「熊本からは、遠くて、なかなか簡単には来れないな」と思うと、寂しくなることがあります。(続く)

【 子どもたちの作品 】

海で泳げるようになったこと
中之島小学校 4年生 羽生 伊織

ぼくは二年生の時、海でおぼれたことがあり、それから海がこわくて泳げませんでした。友だちとっしょに海へ遊びに行っても、一人、陸で友達が泳いでいるのを見ていただけで、とても残念でした。

夏になり、いやな水泳教室が始まりました。でも、「今年こそは泳げるようになりたい」という気持ちがでてきました。そこで、「顔を海につけられるようになる」という水泳の目標を立てました。

水泳教室が始まりました。おそろおそろかたまで海に入りました。水になれたので水中じゃんけんをすることになりました。海に顔を付けるのがこわくてたまりません。このままでは泳げないままだと思い、勇気をふりしぼり、大きく息をすって思い切り海に顔を付けました。すると、海の中はとてもきれいで魚もたくさん泳いでいました。魚を見たら今まであったこわさがとんでいきました。2回目3回目と自信を持って顔を付けることができました。今までよりもっと泳げるようになりたいという気持ちが強くなりました。

すると、先生が「浮く練習をしよう」と、おっしゃいました。あさいところで浮く練習をしました。まず、右手で鼻をつまみ、左手で岸をつかんでおそろおそろ両足を底からはなしました。すると体ははずみ、水を飲んでしまいました。

した。少しこわかったけれど、何回もくり返すうちに浮く感覚が分かってきました。一人で挑戦してみました。手と足を大きくのばすと、ぼくの体は浮いていました。

「やった」、大きな声が出ました。先生も「やったね」と言って喜んでくださいました。すぐに、みんなのところへ行って、浮けるようになったところを見せました。「すごいじゃん」と言ってくれました。もっと上手に泳げるようになりたいと思いました。次にバタ足に挑戦すると、うそのように前に進みました。

夏休みになりました。今年の夏休みは、学校のみならず泳ぎました。最初はクロールに挑戦しました。まだ、5メートル進むと息が苦しくなってしまいます。次はもぐってみました。体が浮いてもぐれません。そのうちコツが分かってきて海底の石がとれました。上から見る海の景色より、魚が大きたくさん見えます。最後に飛び込みをしました。最初はこわかったけれどやっているうちに楽しくなっていました。

最初のぼくは海のこわさから逃げていました。でも、勇気を出すことで泳げるようになり、こわかった海が楽しい海になりました。これからももっと上手になってみんなとっしょに泳ぎたいです。

十島村の小・中学校からのメッセージ

口之島小・中学校

教諭 新澤 あけみ

私は、昨年、子ども2人(現在：小3、小6)を同伴して、初めての離島勤務となりました。「フェリーとしま」に初めて乗船して、子どもの寝顔をみながら「頑張るぞ」と決意したことが、ついこの間のように思い出されます。

子どもは2人ともアレルギー性鼻炎で、赴任前は、専門医による定期通院ができない心配・不安がありました。しかし、気になる症状は診療所や巡回診療で受診できており、また、子ども達自身も海や学校で元気に遊びまわっているせいか、随分たくましくなっています。

生徒の在籍数は、現在1年1人、2年1人、3年1人の計3人です。授業は各学年ともマンツーマンで個別指導ができるため、生徒の成長が手に取るようになります。また、教える側の課題もはっきりするため教師自身の成長にも繋げることができます。

昨年は、1・2年の担任で、専門の社会科以外に国語も担当しました。2年目となる今年は、3年担任で、小学6年の社会科も担当しています。極小規模校のため一人当たりの校務分掌は相当数にのぼります。

しかし、それでも、「口之島への赴任=運命の出会い」と感じて自分なりに精一杯頑張れるのは、何よりも生徒の素直さ・屈託ない笑顔、保護者の協力・温かさがあってこそです。島民の方々もとても優しく、口之島で暮らしたこの2年間、嫌な思いをしたことは一度もありません。

教職員仲間である「あなた」へのメッセージ

私のように、身寄りも誰一人いない離島で、子どもを連れての単身赴任は、いろいろ大変であることも事実です。上記の仕事を家庭に持ち帰ったうえで家事・育児をするのはかなりの覚悟と忍耐が必要です。このような状況の中で、励ましてくれる周囲の人たちに心より感謝する日々を過ごしています。

もし、こちらに赴任することになりましたら、目の前にいる島の素晴らしい子ども達のために共に取り組んでいけたらと考えています。